

形容詞「かしこまし」小考

森脇茂秀

一、はじめに

仮名文と比較して、訓読に用いられる形容詞は、異なり語数、使用回数共に少数であることが、築島裕博士によって明らかにされている。

訓読に用ゐられる形容詞は、その異なり語数も使用回数も和文に比べて相当に少数だと言ふことが出来さうである。大慈恩寺三藏法師伝の承徳點・永久點の異なり語数は僅か九二語であるのに対し、源氏物語に於ける異なり語数は八三六語に上る。動詞に於ては、慈恩伝古點七八四語に対して源氏物語五三〇一語（共に漢語動詞を除く）であつて、源氏物語の方が約六・五倍であつたのに、形容詞では源氏物語の方が約九・一倍となつてゐる。（略）このように、形容詞・形容動詞の如き「形容語」が、慈

恩伝に少く、源氏物語に多いといふことは、訓読語に於て形容詞・修飾的な表現が乏しく、源氏物語ではそれが豊であることを反映してゐることになるであらう。

（『平安時代の漢文訓読語につきての研究』

（一九六三）（昭和38）六二〇頁）

博士は、『源氏物語』に形容詞が多く、豊かに表現されておられ、また訓読語に於いては形容詞的な表現が乏しく、その量的差異は「形容詞」な表現の必然性の有無によつてお考えのようである。

また、博士は、「形容詞を語構成の上からみると、源氏物語では、（中略）漢語を含むものが多い」こと、「当時の訓読に用ゐられた形容詞には、ク活用とシク活用との区別がある」こと等も同書で併せて指摘しておられ、

これら数量的概観と考察は、中古の形容詞の全体像を考察する上で、欠かすことが出来ないように思われる。

右のように、訓読語に「形容語」の場面が少ないため、「和文語」「漢文訓読語」という対応関係を考察する上では、具体的な語形を見出しにくいのであるが、その中で、ここで問題にしようとする形容詞「かしかまし」は、その出現は仮名文であり、「漢文訓読」には「カマビスシ」が用いられる、といった対応関係が認められる語形である。また、この漢文訓読語「カマビスシ」については、古くは「ク活用」で、後に「シク活用」に転じたと史的に変容していることが、前出築島博士の御著書に御指摘があり、ユニークな変遷過程を遂げたという点でも注目されるのである。

従つて、本稿においては、中古仮名文中の「かしかまし」という語を取り上げ、その意味用法を分析することで、築島説に導かれながら、所謂形容詞から見た「和文語」「漢文訓読語」の対応関係について考察する一助となることを目的とする。

二、「かしかまし」の語構成と清濁

『首書本源氏物語』（桜楓社）に次のような例がある。（本文中の傍線は筆者。以下、同じ）

・網代のけはひ近く、耳かしかましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかゞはせん。

（『源氏物語』 橋姫 九三三頁）

当該箇所本文の清濁注記には、「みゝかしかましき第五音節の「か」首書清ム。」とあり、清音であつたことを特筆しているが、『日本古典文学大系』等の他の注釈書は「かしがまし」と濁音表記となつている。

・聒 カマ(ヒ・ミ) スシ

（『観智院本類聚名義抄』佛中 7）

・姦 カシカマシ ヨコサマ アサマク カマビスシ

イツワル ミタリ カハシ サマ アハス サ、ヤク

サハカシ カタマシ 又スム サスカニ

中古の「かしかまし」の清濁については、積極的な論拠を見出しにくいのであるが、時代が下って、『日葡辞書』には、「かしかましい」「かしましい」「あなかしましい」が採録されており、次のような記述がある。

・ Caxicamaxij カシカマシイ(響しい) Caximaxij(羨しい)に同じ。物騒な、または、喧嘩な(もの)。▼Anacaximaxij; Caxicamaxij; Sozóna

・ Caximaxij カシマシイ(羨しい) やかましい(こと) または、騒々(こと)。

・ Anacaximaxij アナカシマシイ(あな響しい) Aracaximaxij (あら羨しい)に同じ。まあ、なんとという騒がしきだらう。

古辞書などでは、「かしかまし」の第三音節に濁音で

ある声点が付された例は見出せないこと、また、『日葡辞書』の記述から、少なくとも中世後期までは「かしましい」と清音であったことがわかるため、中古においても第三音節は清音であった蓋然性が高い、と考えられる。これは、『観智院本類聚名義抄』によれば、漢文訓読語カマビスシの第三音節が、①濁音符がある②「カマビスシ」の「ビ」に「ミ」が併記され、異形が存在する、等により、第三音節は濁音とほぼ断定できることと対照的である。

以下、本稿では「かしかまし」は「かしかまし」と清音で表記することにする。

「かしかまし」の第三音節が濁音化することについて、『角川古語大辞典』(一九八二(昭和57) 中村幸彦他編 角川書店)の「かしかがまし」には、次のような記述がある。

「かしまし」と「かまし」の混淆によって成立した語か。古く「かしかまし」であったが、後に「かしがまし」

となつたのは、接尾語「がまし」のへの類推もあろう。人声や物音あるいはうわさ話がうるさく感じられるさま。やかましい。

第三音節が濁音化する要因について、『角川古語大辞典』は接尾語「がまし」のへの類推、をあげており、大略首肯されるべきと思うが、接尾語「がまし」は、古代から近代にかけて造語能力を保持しており、更に詳細な考察が必要となるため、ここでの結論は保留し、別に譲る。ただし、中古における「がまし」は、「はれがまし」のように、「がまし」が下接しても決してマイナス評価を表現する語ばかりではなかったものが、中世以後に、「がまし」が下接した語形は、マイナス評価を意味するものに傾斜してゆくという過程は、「かしかまし」が本来有するマイナス評価的意義との関連からもそれらの関連性が指摘できるように思われる。

また、「かしかまし」の成立は、「かしまし」と「かまし」の混淆により生じた、とする推考は、大変魅力的ではあるが、「かしかまし」が「かしまし」と「かまし」の

混淆のよつて成立したとしても、原形である「かしまし」「かまし」の上代、中古の用例数が共に少ない、という問題点が残る。

一方、『古語大辞典』（一九八三（昭和58） 中田祝夫編 小学館）の「かしかまし」「かしまし」「かまし」の「語誌」を担当された山口佳紀博士は、次のように指摘しておられる。

・「かしかまし」

古く「かしかまし」と第三音節は清音で、「かしがまし」となつたのは近世以後のこと。「かし」は「かしまし」の「かし」に通じ、「かま」は「かまし」「かまかまし」「かまびすし」などの「かま」と同じ。

・「かしまし」

「かし」は「かしかまし」の「かし」と同じく、うるさい、やかましいの意で、「ま」は「こりずま」「かへらま」などの「ま」と同じ接尾語であろう。上代では、「かし

まし」の例が確認できないが、万葉集に「あられ降り」が地名「鹿島（かしま）」の枕詞として用いられている例がある。あられの降る音がうるさいところからかかるようになったものと思われること、また、「所聞多」の字を「香島（かしま）」に当てた歌のあることから、うるさい意の「かしま」という語形がすでに存在していたものと推定される。ただし、形容詞として活用したのか、またク活用、シク活用のいずれであったのかなどの点は、不明とするほかない。

・「かまし」

形容詞としての確例はないが、風土記の地名説話や、平安時代の「あなかま」という言い方などから、形容詞「かまし」の存在が推定される。なお、「あな」と呼応する感動文の文末は、シク活用なら「あなかまし」となるはずであるから、「かまし」はク活用と考えられる。「かまし」の「かま」もこの語の語幹であろう。しかし一方、「みみかまし」「かしかまし」「やかまし」など、「かまし」を後項とする語はいずれもシク活用であるから、

シク活用もあつた可能性がある。

「かしかまし」が「かしがまし」と濁音化したのは、「近世以後のこと」と明確に時期を規定し、『角川古語大辞典』が「かしかまし」を、「かしまし」と「かまし」の混淆によつて成立した混淆説であるのに対し、「かしかまし」の「かし」と「かしまし」「かし」は同じである、という派生関係を説いている。両語の類義関係からすれば、大変興味深い。

「かしまし」については、

・^{カシ}姦 又カシマシ

（『前田本色葉字類抄』 上 97 才 4）

のような例があり、また、

・「すべて交らひせずやあらまし」と恥ぢ感へば、北方、「あなかしまし」。今は取り返すべき事にもあらず。あ

いなし。ないひそ。たゞ憎くおぼえしまゝにせしぞかし」といふに、かひなし。

〔落窪物語〕卷之三 一八三頁

とその存在を知り得る。ただし、この用例について『日本国語大辞典 改訂版』（小学館 二〇〇一（平成13））「語誌」には、「この箇所は本文に異同があり、九条家本どでは、「かしかまし」となっている。同書には他に意味用法が同じ「あなかしかまし」が二例見え、「源氏」にも「かしかまし」や「みみかしかまし」の例はあるが「かまし」はないところから、平安時代語とするには問題が残る」とあり、慎重な立場を取っている。

このように「かしまし」自体は前述の如く、中古において用例数が少ないのである。

また、『落窪物語』の用例では、会話文中に感動詞「あな」と共に用いられ「あなかしまし」形で用いられているが、「かしかまし」も感動詞「あな」と承接した「あなかしかまし」形が見られ、また、語幹とされる「かま」と共起した「あなかま」形も『枕草子』や『源氏物語』とい

つた作品に散見し、感動詞「あな」と「かま」系形容詞との密接な関係が窺えるのである。感動詞「あな」＋「形容詞語幹」については、後で述べる。

一方、『古語大辞典』にも指摘されている、形容詞としての確例はないとされる「かまし」については、「みみかまし」という例で『栄花物語』に存する。

・御心地久しうなれば、いと弱くならせ給ひて、ともすれば消え入りぬばかりにおはします御有様を、内にはうつまじき女房達かはりくく、にまいりて見つゝ、奏すれば、さまくみみかましきまでの御いりども、しるしみえず、いといみじき事におぼし感ふ。

〔栄花物語〕卷一 43頁

この用例は、「かまし」が単独形で用いられた数少ない用例で、『日本国語大辞典 改訂版』他、辞書には採録されていないものがある。が、『栄花物語』以前にはなく、『栄花物語』成立期に（みみ）かまし」という新形

が成立し、それを『栄花物語』が採録したという可能性も否定できない、と思われるし、また、この本文には「みみかしかまし」という異本もあり、「かまし」確定例と断定してしまうことは、保留する。

ただし、中古において「かまし」という語形が存在する、あるいは潜在するということは十分に想定され得るし、その蓋然性は高いということ、その「かまし」単独では、中古の仮名文学作品には表れない、ということをここで指摘しておきたい、と思う。

では、中古において「かしかまし」「かしまし」「カマビスシ」が存したわけだが、『源氏物語』には、「かしかまし」しか現れないという、所謂「和文語」「かしかまし」の特性を考えてみよう。

三、感動詞「あな」＋「形容詞語幹」

〔用例1〕僧正へんぜう

秋の野になまめき立てるをみなへしあなかしかまし花も

ひと時

〔『古今集』巻十九 雑体 一〇一六〕

〔用例2〕また聞え給はば、惟成法師これなりに成りなんと、いと
いとほし。猶人の思ふ中さくるは、大事にはあらずや
といへば、おとゞ、「いらへもせさせずいひなすかな。誰
かはたゞ今、「去り給へ、捨て給へ」と聞ゆる。」「さて、
さにはあらずや、めあはせ奉り給ふは。」「いで、あな、
かしかまし。取り出でても様あしからんか。などかおど
ろくしうはいふべからむ。かたへは妻を思ふなめり。』
いとほしと思ひながら、口ふたげにいへば、(略)

〔『落窪物語』 卷之二 一五六頁〕

〔用例3〕「霧ふかきあしたの原のをみなへし心を寄せて
見る人ぞ見る なべてやは」など、ねたまし聞ゆれば、
「あな、かしかまし」と、はてくは、腹立ち給ひぬ。

〔『源氏物語』 四 総角 四一頁〕

〔用例1〕〔用例2〕〔用例3〕は「あなかしかまし」の
用例で、〔用例1〕は「古今和歌集」中の「歌語」とし
て、〔用例2〕〔用例3〕は引用節中の用例である。〔用

例2」は感動詞「いで」と「あな」が共起しており、「いや、ああやかましい。右大臣のことは言いだしただけでも、わるいのだろうか。どうしてそう仰山らしくいうはずのことなのだろう。」と訳出できる、発話文中の引用節に「かしかまし」が存しており、「いとほしと思ひながら、口ふたげにいへば」という場面である。「用例3」は「腹立ち給ひぬ」場面であり、「用例2」「用例3」共、「感情が表出する」という場面の類似を指摘できる。「用例3」『大系』頭注には「ああ、やかまし(うるさ)い。」とあり、その補注には、「用例1」を挙げている。この「あなかしかまし」は「用例1」『古今和歌集』に「歌語」として採録されるほど、定型化した形であったと考えられるから、感動詞「あな」と「かしかまし」との早期の共起、呼応関係が理解できるように思われる。

「用例4」あたらしいかよふ婿の君などの内裏へまるるほどをも心もとなう、所につけてわれはと思ひたる女房の、のぞきけしきばみ、おくのかたにたたずまふを、まへにゐたる人は心得てわらふを、「あなかま」とまねき制

すれども、女はたしらず顔にて、おほどかにてゐ給へり。「こなる物とり侍らん」などいひよりて、はしりうちてにぐれば、あるかぎりわらふ。

（『枕草子』 三段 45頁）

「用例4」「あなかま」も、やはり引用節に用いられており、後接部「まねき制すれども」から、「あなかま」が、「制止」する場面に用いられたものとして有名な箇所である。「制止」する行為の発話文中に「あなかま」が用いられていることは、自らの「感情の表出」に止まらず、相手の行為に対して働きかける、といった意味用法を意味するであろう。

これまでの「感動詞『あな』＋『形容詞語幹』」は、引用節中に用いられる、といった傾向を示す。『源氏物語』においては、「あなかま」十例、「あなかまあなかま」が一例、用例が存するが、引用節中に用いられる、といった傾向は同様である。

以下、用例を挙げる。

〔用例5〕おとゞも渡り給ひて、うち解け給へれば、御几帳隔てゝおはしまして、御物語聞え給ふを、「暑きに」と、にがみ給へば、人々笑ふ。「あなかま」とて、脇息によりおはす。いと、安らかなる御ふるまひなりや。

〔源氏物語〕一 帚木 87頁

〔用例6〕一日、さきおひてわたる車の侍りしを、のぞきて、童べの急ぎて、「右近の君こそ。まづ、物見給へ。中將殿こそ、これより渡り給ひぬれ」といへば、又、よろしき大人出で来て、「あなかま」と、手かくものから、「いかで、さは知るぞ。いで、見ん」とて、はひ渡る。

〔源氏物語〕一 夕顔 一三四頁

〔用例7〕「例の、御前も追はせ給はず、やつれておはしましけむよ。あな、いみじや」と、言へば、「あなかまあなかま、下衆などの、塵ばかりも聞きたらむに、いと、いみじからむ」と、言ひ居たる、心地おそろし。

〔源氏物語〕五 浮舟 二二二頁

〔用例8〕御供の人など、例の、こゝには、知らぬならひにて、「あはれなる、夜の、おはしましさまかな」「かゝる、御有様を、御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人

もあれど、「あなかま、たまへ。夜声は、さゝめくしもぞ、かしこまましき」など、言ひつゝ寝ぬ。女君は、「あらぬ人なりけり」と思ふに、あさましう、いみじけれど、声をだに、せさせ給はず。

〔源氏物語〕五 浮舟 二二七頁

〔用例5〕「とて」、「用例6」「と」、「用例7」「と」、「用例8」「など」に示されるように「あなかま」はすべて引用節中に用いられている。また、「用例8」は「たまふ」の命令形「たまへ」が下接しており、「あなかま・たまへ」形が三例、『源氏物語』に存しており、その形式の頻用度、乃至は定型化を表していると考えられる。

感動詞「あな」と承接する「かま」形については、「あな」と呼応する形容詞は必ずその形容詞語幹であり、「あなかま」の「かま」は「かまびすし」の「かま」でなく、「かまし」（推定形）の約であろう、と論ぜられた説（馬淵一夫（『国語研究』23 国語文化研究所 昭和30・6）もあり、「あな」の用法を統一的に論じようとするは「かまし」を推定すること自体は当然の事であろうが、問題

は「かまし」の確定例が見出せないということにある。また、『古語大辞典』山口説のように「かまびすし」の「かま」と「かまし」の「かま」を同源とする見方もあり、活用の確定、即ちク活用、シク活用いずれなのか、論を複雑にしている面もあると考えられる。

また一方で、「かま」形に下接するものとしては、『落窪物語』に「かしかまや」『源氏物語』に「あなかまや」が二例、用例が存する。

「用例9」「はやうさぶらひにまれおはしぬ」といへば、「只今人のいひつる事聞えむ。あからさまに出で給へ」と聞えさすれば、「何事ぞとよ。かしかまや」とて、遣戸を押しあけてさし出でたれば、帯刀捕へて、「雨ふる夜なめり。一人な寝そ」といひつれば、いざ給へ」といへば、女わらひて、「そよ」と「ことなかり」といへど、強ひて行きて臥しぬ。

『落窪物語』 卷之二 五七頁

「用例9」の『大系』頭注には「何事だというんです。やかましいこと。「かしがま」はシク活用形容詞「かしがまし」を感動的に言い出した語。「あたらし」に対する「あたらし」と同類。ただし全書本大成久老本「かしがましや」と指摘している。

「かしかま」か「かしかまし」か、ここではにわかに判断することができないが、「や」が下接している用例であることは動かない。『源氏物語』の「あなかまや」と「かま」に「や」が承接したものの二例も併せて、「や」が後接することで、直截的な感情の発露としての表現を、より際立たせる効果があつた、と考えられるのではないか。また、「や」が下接しており、「かま・や」形の類型化を窺い知ることができる。

四一、「かしかまし」

「用例10」「御返りいかゞ聞えん」といへば、「いさ。物いへば、ひがみたりとかしかましういへば、聞きにくし。よき事知り、物のこゝろ知りたらん人、推し量りて申せ

かし」といへば、(略)

(『落窪物語』巻之四 二一八頁)

「用例10」は『落窪物語』中の用例であるが、「さあ知らないよ。何かいうと、間違っているとやかましくいうから」とでも訳出できるであろう。ここでの「かしかまし」の対象は、「人が言うこと」であり、「かしかまし」は「いへば」を修飾している。

以下、『源氏物語』の用例を挙げる。

「用例11」三人、その子はありて、右近はこと人なりければ、「おもひへだてゝ、御有様をきかせぬなりけり」と、泣き恋ひけり。右近、はた、かしかましく言ひ騒がれんを思ひて、君も、「今更にもらさじ」と、忍び給へば、若君の上をだに、え聞かず、あさましく、ゆくへなくて過ぎ行く。

(『源氏物語』一 夕顔 一七三頁)

「用例12」「こよなしや。われも、思ひなきにしもあらずりしを」など、あさましうおぼゆれど、「今、殊更に」と、

うちけざやぎて、参りぬ。いとよそほしく、さし歩み給ふほど、かしかましうおひはらひて、御車のしりに、頭中將・兵衛督、乗せ給ふ。

(『源氏物語』二 松風 二〇七頁)

「用例13」「座をひきて、立ちたうびなん」など、おどしいふも、いとをかし。みならひ給はぬ人くは、「めづらしく、興あり」と思ひ、この道より出で立ち給へる上達部などは、したり顔にうちほゝ笑みなどして、「かゝるかたざまをおぼし好みて、心ざし給ふが、めでたき事と、いとゞ限りなく思ひ聞え給へり。いさゝかもの言ふをも制す。なめげなりとてもとがむ。かしかましようのゝしりをる顔どもゝ、夜に入りては、中くゝいまま少し、掲焉なる火かげに、猿樂がましく、わびしげに、人わろげなるなど、さまゝくに、げに、いと、なべてならず、さまことなるわざなりけり。

(『源氏物語』二 乙女 二八〇頁)

「用例14」(略)かたちよき人は、人を消つこそ、憎けれ」と、の給へば、人々、笑ひて、「されど、御前には、おされたてまつり給はざめり」「いかばかりならむ人か、

宮をば、消ちたてまつらむ」など言ふ程に、「今ぞ、車より降り給ふなる」と、きくほど、かしかましきまで、おひのゝしりて、とみにも、見え給はず。

〔源氏物語〕五 東屋 一五七頁

〔用例11〕は「といつても、右近は又、夕顔の死去を夕顔の宿に知らせると、女房達にやかましく騒がれるかも知れないと思ひ」と訳出できるが、〔用例10〕同様「言ひ騒がれん」を修飾し、その対象は「人間の発話」であると考えられる。〔用例12〕「かしかまし」の修飾部は「おひはらひて」であるが、文意からして「追い払う」動作性動作の中に「発話」が含まれている、と考えられよう。〔用例13〕は「いさゝかもと言ふをも制す」とあり、「制止」の場面であることは明らかである。また、「かしかまし」の修飾部は「のゝしりをる」であり、「ののしる」動作に、「人の発話」が含まれている事は明らかであろう。〔用例14〕も修飾部が「おひのゝしりて」であり、〔用例12〕「おひはらふ」〔用例13〕「のゝしりをり」と共通していることが解る。

〔用例3〕「霧ふかきあしたの原のをみなへし心を寄せて見る人ぞ見る なべてやは」など、ねたまし聞ゆれば、「あな、かしかまし」と、はてくは、腹立ち給ひぬ。

〔源氏物語〕四 総角 四一頁

〔用例15〕御供の人など、例の、こゝには、知らぬならひにて、「あはれなる、夜の、おはしましざまかな」「かゝる、御有様を、御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、「あなかま、たまえ。夜声は、さゝめくしもぞ、かしかましき」など、言ひつゝ寝ぬ。女君は、「あらぬ人なりけり」と思ふに、あさましよう、いみじけれど、声（こゑ）をだに、せさせ給はず。

〔源氏物語〕五 浮舟 二二七頁

〔用例3〕は終止形「かしかまし」、〔用例15〕は係り結びの連体形「かしましき」であるが、共に引用節中に用いられ、その対象は〔用例3〕「ねたまし聞ゆ」こと、「夜声」であり、これまで同様、「発話」「人の発する音声」であることが、指摘できる。

四二、「みみかしかまし」

『源氏物語』では「かしかまし」に「みみ」が上接した「みみかしかまし」形が十例用いられており、一特徴を示している。

〔用例16〕「ごほくと、鳴る神よりも、おどろくしく踏みとゞろかす唐臼の音も、枕上とおぼゆ。「あな、耳（みみ）かしかまし」と、これにぞおぼさるゝ。なにの響きとも聞き入れ給はず、「いとあやしう目さまましき音なひ」とのみ、聞き給ふ。

〔『源氏物語』一 夕顔 一三九頁〕

〔用例16〕は感動詞「あな」と呼応した用例で、やはり引用節中に用いられているが、その対象は、「唐臼の音」であり、「発話」といつた音声そのものではなく、人が行う「行為」が対象となっている。

〔用例17〕「二種づゝ、あはせさせ給へ」と、きこえさせ給へり。おくり物、上達部の祿など、世になきさまに、

内にも外にも、繁くいとなみ給ふにそへて、かた／＼に、香ども選りとゝのへて、かなうすのおと、耳かしかまし頃なり。

〔『源氏物語』三 梅枝 一六〇頁〕

〔用例18〕空の、うち曇りて、風ひやゝかなるに、いといたく、うちながめ給ひて、見し人のけぶりを雲と眺むれば夕の空もむつまじきかなと、ひとり「ち給へど、え、さしいらへも聞えず、「かやうにて、おはせましかば」と思ふにも、胸ふたがりておぼゆ。耳かしかましかりし、砧（きぬた）の音をおぼし出づるさへ、恋しくて、「まさに長き夜」と、うち誦じて、臥し給へり。

〔『源氏物語』一 夕顔 一六九頁〕

〔用例19〕御几帳ども、しどけなくひきやりつゝ、人げちかく、世づきてぞ見ゆるに、唐猫の、いと小さく、をかしげなるを、すこし大きな猫、おひつゞきて、にはかに、御簾のつまよりはしり出づるに、人々、おびえ騒ぎて、「そよ／＼」と、みじろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしかましき心ちす。

〔『源氏物語』三 若菜上 三〇七頁〕

「用例17」の対象も「かなうすのおと」であり、「用例18」は「夕の空もなつかしく、その上、夕顔の宿でかつて聞いた、やかましかつた砧の音をお思い出しなさる、その音までも恋しくて」と訳出できようが、その対象は、「砧の音」であり、人が行つた結果としての「音」という共通点がある。その意味で、「用例19」は「みじろきさまよふけはひ」であるから、直接的に「声」をかけるのではなく、「衣の音なひ」即ち、「みみかしかまし」の対象は「物音を立てる」物音を立てることによつて、相手にその来訪を知らせる、と考えられる。

「用例20」この住む所は、肥前の国とぞ言ひける。そのわたりにも、いさゝかよしある人は、まづ、この少貳のむまごのありさまをきゝ伝へて、なほ、絶えず音づれるも、いと耳かしかましき中に、大夫の監とて、肥後の国に、ぞう広く、かしこにつけては、おぼえあり、いきほひ厳しきつは者有りけり。

『源氏物語』二 玉鬘 三三四頁

「用例20」は「耳かしかましき」対象が、「音づれる」ことであり、「おと」が共通しているが、ここでは「ありさまをきゝ伝へて」「絶えず」「おとづれる」のであり、ここでは「便り」と解することができるように思われる。

「用例21」山風に堪へぬ木々のこずも、峯の葛葉も、心あわたゞしう、あらそひ散るまぎれに、たふとき読経の声（こゑ）かすかに、念佛などの声ばかりして、人のけはひ、いと少なう、木枯の吹きはらひたるに、鹿は、たゞ、籬のもとにたゞずみつゝ、山田の引板にもおどろかず、色濃き稲どもの中にまじりて、うち鳴くも、うれへ顔なり。瀧の声（こゑ）は、いとゞ、物思ふ人を驚かしがほに、耳かしかましう、とゞろき響く。

『源氏物語』四 夕霧 一三六頁

「用例22」おもひ捨てたまへる世なれども、「いまは」と、住み離れなんを、あはれにおぼさる。網代（あじろ）のけはひちかく、耳かしかましき河のわたりにて、しづかなる思ひに、かなはぬ方もあれど、いかゞはせむ。

『源氏物語』四 橋姫 三〇三頁

「用例23」秋のすゑつかた、四季にあてつゝし給ふ御念佛の、「この河づらは、網代の波も、此のころは、いと、耳かしかましく、静かならぬを」とて、かの阿闍梨の住む寺の堂に、うつろひ給ひて、七日のほど、おこなひ給ふ。

〔『源氏物語』四 橋姫 三二〇頁〕

「用例21」は「読経の声（こゑ）」「念佛などの声」ばかりするなかで、ここでの「みみかしかまし」の対象は「滝の音」である。「用例22」は「網代（あじろ）のけはひ」は、「用例19」「みじろきさまよふけはひ」と共通し、被修飾語が「河」である。また、「用例23」は「網代の設備（けはひ）」が近く、網代木に寄る波の耳にやかましい、宇治川の岸の辺で」と訳出でき、「河づら」の「網代の波」が対象となっているが、これらに共通するのは「水の音」という点であり、人の発する「音声」ではなく、自然の、あるいは人為的な「音響」が対象となっている。

「用例24」女房にも、け近く馴れ寄りつゝ、思ふ事を語

らふにも、たよりありて、夜昼、あたり去らぬ耳かしましさを、うるさきものゝ、心苦しきに、かむの殿も、おぼしたり。

〔『源氏物語』四 竹河 二五三頁〕

「用例25」さまく、思ひ給ふに、御文あり。「れいよりは、嬉し」と、おぼえ給ふも、かつはあやし。秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、かたへ、いと濃くもみちたるを、おなじ枝をわきて染めける山姫にいづれか深き色と問はゞや さばかり、恨みつる気色もなく、言ずくなにとそぎて、おしつゝみ給へるを、『そこはかとなく、もてなして、やみなむ』となめり」と、見給ふも、心さわぎて、耳かしかましく、「御返り」といへば、「きこえ給へ」と、ゆづらんも、うたておぼえて、さすがに、書きにくく、思ひみだれ給ふ。

〔『源氏物語』四 総角 四〇九頁〕

「用例24」は「意中を話し合うにも、便宜があるので（女房に取次を頼むと）、夜も昼も、女房達が玉鬘のそばを離れず、藏人少将の申出を取り次ぐ騒々しさを」と訳出

できるが、ここでは、「たより」に対する取り次ぎの煩わしさが「うるさきもの」となっている。「用例25」は、「やかましきうるさく、「御返事を早く」と言うから」と訳出できよう。

この「用例24」「用例25」は、「たより」という点で共通し、実際に「発話すること」が「みみかまし」のではなく、相手につたえる「行為」が「みみかしまし」である、という点で、他の用例と共通している、と考えられる。したがって、「みみかしまし」の対象は、自然の水音や、人の動作などの「音響」が対象であって、「かしかまし」とはその対象を異にすると考えられる。

五、おわりに

感動詞「あな」＋「形容詞語幹」は引用節中に用いられ、『源氏物語』においては、「かしかまし」の対象は、人間の発する「音声」であるが、「耳かしまし」の場合、その対象は、自然に生じたり、また人間が動作により生じた「音響」である、という明確な相違点がある。

「みみ(耳)」と「かしまし」とが接合することで、それらの対象を区別していたと考えられる。『源氏物語』の用語は、形容詞の一用法からしても、整然とした用語選択があつた論拠となりうるのではないかと考えられる。

・同じき十二月二日、にはかに都がへりありけり。新都是北は山に添ひてたかく、南は海ちかくしてくだれり。浪の音つねはかまびすしく、塩風はげしき所也。

〔『平家物語』上 巻第五 三七九頁〕

・ 誼 | カマヒスシ | ソシル | サハカシ | ミル

〔『観智院本類聚名義抄』法上 50〕

右の『平家物語』の用例は、対象が「浪の音」であるから、『源氏物語』では、「みみかしまし」とでもあるところであろう。後世、漢文訓読語カマヒスシが漢字仮名混じり文などで、シク活用に転ずるのは、主観的な感情表現の獲得と恐らく無縁ではないと思われるが、「さしがし」等の他の類義語との関係や史の変遷は、今後の

課題としたい。

本文に引用したテキストは、『首書本源氏物語』は『源氏物語 全』（今泉忠義他編 桜楓社 一九七七（昭和52））に依った。本文は『観智院本類聚名義抄』（正宗敦夫 風間書房 一九七四（昭和49））、『邦訳日葡辞書』（土井忠生他編 岩波書店 一九八〇）そのほかは『日本古典文学大系』に依り、必要に応じて底本を参照し、本文の表記を改めたところがある。

（本学助教授）